

何本かの映画を見て、見ている本人にとっては大して気にしていなかったものの、後で考えてみると何らかの共通したテーマなり事象が浮かび上がることがあります。例えば、以前取り上げたトニー・ケイ『アメリカン・ヒストリーX』（1998年）と吉田恵輔『四月の余白』（2026年）のように。今回取り上げたいのはエルンスト・ルヴィッチ（1892-1947）の『天国は待ってくれる』（1943年）です。ナチスの台頭によって、ユダヤ系の主にドイツで活動していた映画人たちはハリウッドに活動の場を移します。移さざるを得ないと言った方がよいでしょう。そして、ハリウッド映画の中で確固たる地位を築くどころかアメリカ映画界の隆盛に大きく寄与することになります。ざっと名前を挙げるだけでもルヴィッチのほかにはビリー・ワイルダー（1906-2002）ウィリアム・ワイラー（1902-1981）フリッツ・ラング（1890-1976）オットー・プレミンジャー（1905-1986）ロバート・シオドマク（1900-1962）といったところでしょうか。一方、彼らの活躍した時期のアメリカ出身の監督はといえば、ジョン・フォード（1894-1973）ハワード・ホークス（1896-1977）フランク・キャブラ（1897-1991）ジョン・ヒューストン（1906-1987）あたりになるでしょうか。こうして名前を挙げただけでも、それぞれの作風の違いが見えてきそうです。

エルンスト・ルヴィッチの場合、ナチスの台頭する時期の随分前にハリウッドでの活動を開始します。その理由は、当時のハリウッドの大スターであるメアリー・ピックフォード（1892-1979）からの強い要請があったからです。所謂ルヴィッチ・タッチなる言葉を生み出すことにはなりますが、本作はまさにその典型たるべく作品でしょう。それでは、ルヴィッチ・タッチとはということになりますが、端的に言えば直接的な描写は避け、洗練された省略や細部のクローズアップを駆使して観客の想像力を刺激し、登場人物の心理や状況をユーモラスかつ上品に伝える演出手法と言えるでしょう。この系統としては、レオ・マッケリー、フランク・キャブラ、ジョゼフ・L・マンキーウィッツといった名匠たちが挙げられます。本作では、人間の不道德や浮気を説教せずに小粋に笑い飛ばすというベルリン特有の乾いた都会的エスプリがベースにあったと言われています。ルヴィッチのセリフに頼らず映像のディテールだけで男女の機微を表現する技は、差し詰め日本で言えばマキノ雅弘といったところでしょうか。このあたりは、やはりサイレントで経験を積んだ賜物とも言えるのでしょう。また、ルヴィッチ映画を成立させるためには、ソフィスティケートされた感覚をあらかじめ身に纏った美男美女の存在が絶対条件とも言えるでしょう。本作でのドン・アメチー（1908-1993）とジーン・ティアニー（1908-1993）はまさに適役です。ルヴィッチが1939年に発表した『ニノチカ』についても触れない訳にはいかないでしょう。サイレント時代からミステリアスな魅力で決して笑顔を見せないグレッタ・ガルボがソ連の堅物な女性官僚を演じます。ここでガルボは部下のズッコケに堪えきれず大笑いをしてしまうのです。そのキャッチコピーが「ガルボ笑う!」というもので映画史における大事件でした。

ビリー・ワイルダーはオーストリア出身で1943年にナチスを逃れハリウッドにやってきますが、英語もままならず困窮した生活を送っていましたが、救いの手を差し伸べたのがルヴィッチでした。才能を見抜き、自作の脚本家として抜擢し、この『ニノチカ』は二人の共同脚本です。ワイルダーは独り立ちし

た後も「ルヴィッチならどうする？」と常に自信に問いかけていたと言われます。

本作の日本劇場公開されたのは約半世紀後の1990年のことです。1980年代後半から1990年代にかけて、日本のミニシアターや映画ファンの間で、ハリウッド古典映画や「ルビッチ・タッチ」と呼ばれる洗練されたコメディ映画の再評価ブームが起こったことが引き金になったようです。

ドイツの映画作家ファティ・アキン（1973~ ）はハンブルグでトルコ移民の二世として生まれました。その事由こそ違え、祖国を離れ活動することからすれば、広義にとればルヴィッチと同様です。長編映画の監督デヴュウを果たしたのは1998年です。監督して30年近いキャリアを持つことになります。ファティ・アキンの新作『白パンと独裁者』（2025年）が公開されたところです。ナチス高官の一家が戦火を逃れハンブルクからこの作品の原題でもある「アルムル」というドイツ北部のデンマークとの国境近くの島へ疎開しますが、そこでの生活をナチス崩壊の日まで捉えます。設定としてはジョナサン・グレイザーの『関心領域』（2023年）にシンクロするところもありますが、よりリアリズムを感じますし、主人公の少年が母親のために白パンとバターと蜂蜜を手に入れようとする健気な姿は、サダム・フセインの誕生日のためにケーキを作るための材料集めに奔走する少女を描いたハサン・ハーディの『大統領のケーキ』（2025年）を強く想起させます。高い評価の得られる作品と感じ入ったところですが、ファティ・アキンの2017年の作品『女は二度決断する』を再び見ることに駆られてしまったのは、やはり移民問題が気になっていたからでしょうか。トルコ移民の男性と主人公カーチャ（ダイアン・クルーガーの演技は秀逸）は、男性の麻薬取引の容疑による服役後に結婚しますが、数年後実業家となった彼のオフィスが何者かに爆破され、カーチャは夫と息子を亡くします。そこで容疑者として出てきたのがネオナチの若いカップルです。法廷闘争が続き、二人には無罪が言い渡されます。実に不合理な判決と思われるのですが「疑わしきは罰せず」なのです。さて、ここからカーチャのネオナチカップルへの復讐劇が展開されます。カーチャにとっての二度の決断を考えた場合、一度目はネオナチカップルを標的とした爆弾をセットし狙い通りの状況を作り上げたことであり、二度目は二人を殺害できる状況を作り得たものの逡巡し、夫と愛児のいない希望のない人生を終わらせたいと決断したことではと解釈します。自死の覚悟がここに確固たるものとして完成します。ファティ・アキンは、そのためにカーチャが夫と愛児の死後に待のタトゥーを完成させるという伏線を張ります。どの程度の理解度を持っていたかは不明ですが、武士道をここに持ち出し自死の正当性をここに求めたかのようです。言い換えれば散り際の美学を表現したかったのかもしれませんが。近代西洋の法（裁判）が、ネオナチの犯人を「証拠不十分」という屁理屈で無罪にしてしまったとき、カーチャが西洋的な価値観を見限り、東洋的な「名誉と命を懸けた自己犠牲による処罰（＝武士道精神）」にシンボライズされる力を借りて立ち上がるというのは、ファティ・アキンの多文化の象徴性から見ても非常に一貫性があるようにも思えます。

ラストでファティ・アキンはこの復讐劇の悲壮感を表現する代わりに、静謐さを出しました。ごく短い時間ではありますが、J・S・バッハの音楽を思わせる崇高な旋律が静謐さを一層引き立てるのです。（文中敬称略）